企画展「川のしくみ」では川のことを分かりやすく解説します

行く川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず

鴨　長明　「方丈記」序文より

あまりにも有名なこの序文は、川の生態系に関する本質を鋭く表現していることから、欧米の水生昆虫学の教科書にも引用されています。水が流れているのが川だ、と言うのは容易いが、川とは何かと問われるとなかなか即答するのが難しいものです。川を適確に表現したこの序文では、水の流れにこそ川の本質があり、世の中の様子も川によく似ると述べています。川の仕組みが分かれば、世の中の仕組みが分かるとまでは言いませんが、人々に多様な恵みをもたらす川について、果たし私達はどれだけのことを知っているのでしょうか。

例えば、「どうして水が汚れるの？」、「メダカやドジョウはどうして減ったの？」、「川にとって森はどうして大切なの？」、「コンクリート３面張りだとどうしてダメなのか？」といった、素朴な疑問に答えることが出来るでしょうか。とある場所で、川の専門家を相手に対話形式の講議を行ったところ、これらの疑問に適確に答えることが出来た人は、ほとんどいませんでした。新聞やニュースでも川の環境問題はよく取り上げられますが、「川の工事」や「水質の悪化」がスケープゴードにされるだけで、その理由や仕組みについてはおざなりとなっています。これらの疑問に答えるためには、水の流れが作り出す川の仕組みを知っておかねばなりません。

川の仕組みは知っているようで意外に知らないことが多いのです。その理由は、一般向きの書籍が普及していないことと、学問分野が極めて細分化されていることが関係するように思います。生態学の知識、分類学の知識、地学の知識、化学の知識、工学の知識といった細分化された専門知識を再統合し、川の仕組みを博物学的に再構築して、分かりやすく解説することは、まさに博物館の得意とするところです。

この夏の企画展「川のしくみ」では、皆さんの川の環境に関する疑問に対して、標本、模型やジオラマ等組み合わせて、川の仕組みを実感として捉えられるように様々な工夫を施しました。展示には、魚や水生昆虫の標本をプラスティック樹脂で固めた封入標本やハンズオン型の模型など、その場で触れるものを並べ、楽しみながら学ぶことが出来ます。また、兵庫県河川計画課が実施してきた川の生物調査の速報などを交えて、川の環境を詳しく知りたい人にも役立つような資料も展示いたします。この夏、川遊びに出かける予習として、ぜひ博物館にお越しいただければと思います。

（自然・環境マネジメント研究部　三橋弘宗）

川の流れの多様性

～森から川へ、川から海へ～

下の写真を見ると、一口に川と言っても源流部から河口部まで、川は実に多様な流れ方をしているのが分かるでしょう。上流部は勾配が大きいために流れが急になりますが、下流部では逆に勾配が緩く穏やかな流れになります。当たり前なのですが、水の流れ方によって、石のサイズ、水温、水質、流速、淵の大きさ、川幅、餌の量、洪水時の勢いといった生物の生息と関連する環境要因が支配されるのです。川の生物たちは、種類ごとに上流から下流、そして海へと続く環境の変化に上手く対応して暮らしてきました。つまり、川の流れによって生み出される多様な景観が、多様な水生生物を支えているのです。森から川へ、川から海へ。この一連の流れが奪われると、川はたちまち川で無くなってしまいます。

川の自然を再生すること。それは、源流から海にかけて、地形の生み出す重力に逆らわないことなのではないでしょうか。

（自然・環境マネジメント研究部　三橋弘宗）

上流部の景観

千種川（千種町）

中流部の景観

市川（市川町）

下流部の景観

加古川（加古川市）

河口部の景観

千種川（赤穂市）

写真協力：株式会社スカイマップ